

ファッション化過程における「不可逆点」と統一戦線 ：プーランツァスの所論によせての覚書

石川, 捷治
九州大学法学部助教授

<https://doi.org/10.15017/1789>

出版情報：法政研究. 49 (1/3), pp.337-359, 1983-03-25. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：



ファッショ化過程における「不可逆点」と統一戦線

——プーランツァスの所論によせての覚書——

石川捷治

はじめに

一 プーランツァスの所論

(一) 特殊な政治危機 (二) ファッショ化過程

二 「不可逆点」の問題点

三 統一戦線成立の客観的要因と主体的要因

四 ファッショ化過程と統一戦線

(一) ファッショ化過程の諸段階とファッショ化のダイナミズム

(二) ファッショ化過程における統一戦線

おわりに

はじめに

一九七〇年代後半から今日までのわが国におけるファシズム研究の盛況には目を見張らせるものがある。敗戦直後の時期、一九五〇年代前半の時期につぐ戦後第三の研究のピークを迎えているといっても過言ではないように思われ

る⁽¹⁾。敗戦直後のファシズム研究の高揚が、戦争体験と戦前・戦中の日本の政治のあり方への深刻な反省に裏打ちされており、第二のピークであった一九五〇年代のそれが、眼前に展開される「反動化」への危惧によって触発されたものであったことはいうまでもない。第三のピークである今日の研究の盛況も、今日の政治的・社会的・経済的状况と無関係ではないであろう。第三の研究のピークが、第一および第二のピークと異なっている点の一つは、ファシズム研究の一環をなす反ファシズムの研究がファシズム自体の研究業績の多さに反比例するが如くに少なくなってきたることである。とくに、反ファシズム運動や反ファシズム統一戦線に関する研究は、一九七〇年代末から八〇年代になってだんだんと低調になってきているように思われる。ファシズムがかならずしも過去の歴史的存在だけでなくるきざしがみられ⁽²⁾、他方で核戦争の現実的危険性が人類の破滅をも導きだしかねない今日の状況⁽³⁾において、過去の反ファシズム運動の歴史的経験から多くのものを学びとる必要があるはずである。このような時に、反ファシズムの研究が一九七〇年代前半に比しても失速きみであることは、残念なことといわざるをえない。

反ファシズム運動の研究、なかでも統一戦線運動の研究は、一九六〇年代後半から一九七〇年代において一定の研究成果を蓄積した⁽⁴⁾。その成果がさらに発展させられずに研究が停滞傾向にさえある。それにはそれなりの理由があるように思われる。すなわち、今日の時点においては一九七〇年代と異なり、統一戦線の現実的可能性が存在しないと一般に考えられている状況が反映していると思われるが、同時に、これまでの統一戦線研究のなかに存在した安易さのために、研究のさらなる進展が阻まれていることを認めざるをえない。それは第一に、研究が意識・無意識のうちに既存の政治テーゼを前提とした統一戦線論に立脚していたため、統一戦線の歴史の実態に迫りえなかったこと、第二に、反ファシズム運動の研究が、ファシズム研究の成果を充分にとり入れる努力が弱く、ファシズムという「敵」の分析を欠いだ運動だけの研究になっていたこと。第三に、日本、アジア、ヨーロッパ等の統一戦線の研究がそれぞ

れ別個の視角や方法でなされ、ほとんど方法論的交流がなされなかったこと。これらの弱点のために、統一戦線研究が魅力のとばしいものになっていたことはいなめないように思われる。⁽⁵⁾ これらを克服するためには、これまで自明視されてきた事柄についても、出発点にまで立ち返って検討をしない必要がある。おそらく、次のような問題も、その一つであろう。

ファシズムの台頭に対しては、反ファシズム統一戦線を結成して闘うことの有効性が一般に信じられている。フランス人民戦線などが、その成功例としてあげられる。しかし、フランスの場合は、ファシズムの本格的展開があったわけではない。あとで詳述する厳密な意味における「ファッション化過程」（とくにその第二段階）が存在しなかったか、もしくは存在したとしてもごく初期の段階において中断したのであった。ファシズムが自己を本格的に展開したイタリア・ドイツ・日本等では反ファシズム統一戦線は不成功に終わった。それはなぜなのか？ そもそも統一戦線はファッション化過程においては実現しえないものであろうか。

ニコス・プーランツァス (Nicos Poulantzas) は、⁽⁶⁾ ファシズムに統一戦線を対置する一般的傾向ならびに研究の基調に対して鋭い批判をつきつけた。一九七〇年以来彼は、独特の枠組み設定とタームを提示し、ファシズム解釈の一方方向を鮮明にするとともに、ファッション化過程においては反ファシズム統一戦線（人民戦線）などほとんど問題になりえないことを説く。はたしてプーランツァスの問題提起とはいかなるもので、それをどのようにうけとめるべきなのか。いま、プーランツァスのファシズム論について全面的に検討する準備はないが、ファッション化過程と統一戦線の関連についてすこし検討をくわえ、今後の研究の手掛りとしてたいと考える。

(1) わが国におけるファシズム研究の動向については、安部博純「日本ファシズムの研究視角」『歴史学研究』四五二号、一九七七年、二二—二二ページ、西川正雄「ファシズム」(『現代歴史学の成果と課題』青木書店、一九七五年、四—二三ページ)

ジ)、および『現代歴史学の成果と課題Ⅱ』第三巻、青木書店、一九八二年、六四—九九ページ、を参照。

- (2) 今日における「反動の諸形態」は、もちろん、ファシズムあるいはネオ・ファシズムだけに限定されるべきものではない。「権威主義体制」「国家コーポラティズム」等の可能性を考慮する必要がある。ファシズムあるいはネオ・ファシズムは一つの可能性として存在する。浅沼和典・河原宏・柴田敏夫編『ファシズムの現在』新評論、一九八〇年、を参照されたい。なお同書は、すぐれた問題提起の書物であるが、ネオ・ファシズム以外の「反動の諸形態」については、あまり考慮がはられていない印象をうける。

- (3) Comprehensive Study on Nuclear Weapons, Department of Political and Security Council Affairs, United Nations Centre for Disarmament, Report of the Secretary-General, A/35/392, 12 September 1980, United Nations New York, 1981. p. 8., 服部学監訳『核兵器の包括的研究』連合出版、一九八二年三月、一八ページ。

- (4) この期の統一戦線史研究の概観は、拙稿「ワイマール共和国期の統一戦線運動——成立条件に関する一試論——」『法政研究』(九州大学法学部創立五十周年記念論文集) 第四六巻第二—四合併号、一九八〇年三月刊・所収参照。

- (5) 第二次大戦後における内外の統一戦線史研究の動向とそこから導きだされた研究史の課題についての詳細な検討については、岡本宏「統一戦線史序説(一)」『熊本法学』(熊本大学法学会) 第三十二号、一九八二年三月刊・所収を参照されたい。

- (6) プーランツァスの紹介と論争については、田口富久治『マルクス主義国家論の新展開』青木書店、一九七九年、八九—一六ページ、およびニコス・プーランツァス、田中正人訳『資本の国家』ユニテ、一九八三年、第一章(道程)、ならびに一九五—二二一ページを参照されたい。なお、彼は一九七九年秋、突如としてこの世を去ってしまった。

一 プーランツァスの所論

(一) 特殊な政治危機

プーランツァスは、ファシズムを「例外的な資本主義国家形態の特殊なレジームの形態」⁽¹⁾(a specific form of

regime within the exceptional capitalist State form)と規定し、その形態に到達するファシヨ化過程について、議会制民主主義とファシズムとの間の進化論的「直線的な連続的」有機的過程として把握してはならず、「特殊な政治危機」(political Crisis, Politische Krise)に照応した飛躍を含む過程としてみなければならぬと強調する。政治危機の概念は、「コミンテルン等においては「革命的情勢」と同一かもしくはそれへの成熟という観点から理解される傾向が強かった。プーランツァスはそのような考え方を批判し、「厳密な意味での革命的情勢と区別される政治危機」すなわち「特殊な政治危機」を明らかにする。彼によればその特殊性は、一般の政治危機は、 $\wedge$ 均衡 $\wedge$ (equilibrium, Gleichgewicht)——二つの同等な主要勢力間の均衡およびいわゆる「破局的均衡」——に照応しているが、ファシヨ化を導きだす「特殊な政治危機」は、いかなる意味でも均衡という現象はあらわれないのだとするところにある。

この「特殊な政治危機」は、「 $\wedge$ 漸進的な発展のリズムをとることをやめてファシズムへと到る諸矛盾の集積状況」であり、「本質的に、階級闘争の領域、 $\wedge$ 社会的諸関係 $\wedge$ の領域のもつ特殊な特徴に起因する。しかしながら政治危機は制度体系、つまり国家諸装置の深刻な裂け目をともなっている」とし、階級闘争の領域の特殊な状況だと把握される。彼が特徴づけた階級闘争の特殊な状況とは、資本家階級と労働者階級との関係でいえば、労働者階級がすでに敗北し、資本家階級のみが主として問題となるような「ブルジョアジーこそが主要矛盾の主要側面であり続ける」状況である。したがって彼の場合、支配的諸階級およびその階級的分派の間の内部的諸矛盾の深刻化・悪化状況こそが、「特殊な政治危機」の内容である。支配的諸階級およびその階級的分派の同盟は「権力ブロック」(le bloc au pouvoir, power bloc, Block an der Macht)という概念で提示されているので、ファシズム化過程は「権力ブロックによる階級闘争の公然たる政治化過程」でもある。

(二) ファシショ化過程

プーランツァスは、ファシショ化過程 (Faschisierungsprozess) に関連して、「過程の開始」(start of the process) と「不可逆点」(point of 'no return', Punkt der Irreversibilität) という示唆的な概念を提示した。「開始」点については、「ファシズムの起源」の問題すなわちファシズムの思想や運動あるいは組織が発生した時点と混同してはならない。なぜなら、それらは、ファシズム化過程の実質的な開始以前から長期にわたって成長していたり、ファシショ化過程が存在しない場合でも、ファシズムの思想・組織・運動は存在しうるからである。そして彼はドイツ、イタリアについて具体的な時点を明示する。ドイツは一九二七年前後、イタリアは一九二〇年末―二一年初めだという。しかし、「開始の特徴は、じつは、個々の特徴の集積、ないしむしろそれらの系統的配置によって示され⁽⁸⁾」るとし、「開始点」の指標を明らかにしてはいない。だが、「ファシショ化過程の開始は、顕著な一連の労働者階級の敗北を前提としている⁽⁹⁾」との表現にみられるように、「労働者階級の敗北」を開始の「前提」にし、「ファシショ化過程の開始は、例外的国家諸形態に向けてのブルジョア諸政党の急進化 (radicalization) に照応している⁽¹⁰⁾」とし、ブルジョア諸政党の「急進化」が始まった時点が、ファシショ化過程の「開始点」であることを示唆している。「不可逆点」について、プーランツァスはいふ。「ファシズムがそれに抵抗し、回避することのできる現象であるとしても、それでもなお、それ以降になるとその過程が逆行しにくい時点をその過程のうちに見出すことができる。この時点は、ファシズムの権力掌握 (Machtergreifung) そのものとは一致していない⁽¹¹⁾」とし、「権力掌握」以前にそのような時点が存在すると注意を喚起した。そしてドイツについては、一九三二年五月のブリュニング内閣崩壊の時点 (ブリュニング内閣の最終段階を含む)、イタリアについては一九二二年を「不可逆点」としてあげている⁽¹²⁾。彼は「権力掌握」と「不可逆点」との関連を、「じつのところこの権力掌握は、根本的事態が処理され、決定され

た時のみ生起する、単なる最終的な形式的行為として、つまり既に獲得されている勝利の確認としてあらわれるのである。（不可逆点の……石川）問題の重要性は明らかである⁽¹³⁾とす。「権力掌握」を「単なる最終的な形式的行為」とみることについてはのちに述べるような疑問点があるが、プーランツァスが「不可逆点」を重視する論理は理解できる。

「不可逆点」の内容はいかなるものであるか。「不可逆点」において、ファシズム政党は、大資本という分派に一定の保証を与えることによって、その支持を得る⁽¹⁴⁾。あるいは「ヘゲモニー確立不可能の時期の開始をもって、不可逆点が刻み込まれた⁽¹⁵⁾」と述べ、「権力掌握」（内容的には「政権掌握」、すなわちファシスト政権の成立という意味で使用されている）は「既に獲得されている勝利の確認」であり、「単なる最終的な形式的行為」にすぎない。実質的な「勝利」の時点が「不可逆点」であり、その具体的内容は、「ヘゲモニー確立不能」（ヘゲモニーの危機）のなかで、ファシズム政党が大資本の支持をえたことにある。

プーランツァスは以上紹介した「開始」点、「不可逆点」、「権力掌握」などのメルクマールをもちいてファッション化過程を次の四つの段階に区分している。すなわち、(一)ファッション化過程の「開始」から「不可逆点」に至る時期、(二)「不可逆点」からファシズムの「権力掌握」に至る時期、(三)権力の座についたファシズムの第一期、(四)ファシズムの安定期、である⁽¹⁶⁾。

- (一) Nicos Poulantzas, *Fascism and Dictatorship: The Third International and the Problem of Fascism*, Verso Editions, London 1979, p. 357, *Faschismus und Diktatur—Die Kommunistische Internationale und der Faschismus*, Trikont, München 1973, S. 386, プーランツァス（田中正人訳）『ファシズムと独裁』社会評論社、一九七八年、二二三ページ。（英語版ページはp、独語版ページはS、邦訳は同訳書ページと以下しるす。）英語版、独語

版、邦訳版は、それぞれ本文の省略や註のつけかた等において異なっている。仏語版 (Nicos Poulantzas, *Fascisme et dictature : la IIIe Internationale face au fascisme*, Cf. Maspero, Paris 1970) は手元にないたため参照できなかった。

なお、プーランツァスの「例外的な資本主義国家形態の特殊なレジームの形態」というファシズム規定は注目に価する。安部博純氏の次のような指摘とも関連をもつと思われる。「ブルジョア民主主義からファシズムへの転換がたんなる国家形態レベルにとどまらず、体制レベルに及ぶ重大な転換として捉えなければならないのである。また、そうしてこそはじめてファシズムの歴史的意味を認識しようと思う。」(安部博純「日本ファシズム体制論」、日本現代史研究会編『日本ファシズム(1)国家と社会』大月書店、一九八一年、二二ページ)

(2) Poulantzas, p. 59, S. 60, 同訳書、四二ページ。

(3) プーランツァスは、アントニオ・グラムシ (A. Gramsci) が「カエサル主義は、あいたたかう諸勢力が破局的なかたちで均衡をたもっている情勢、すなわち、闘争の継続が相互的な破壊をもつてしか終結されえないようなかたちで均衡をたもっている情勢を表現するものである。」(グラムシ、石堂清倫・前野良編訳『現代の君主』青木書店、一九六四年、二二八ページ) としているのを「破局的均衡の危機」と把握している。しかしこのような理解については、批判がある。山口定『現代ファシズム論の諸潮流』有斐閣、一九七六年、一四二―一三三ページ。竹村英輔『グラムシの思想』青木書店、一九七五年、一二九ページを参照。

(4) Poulantzas, p. 59, S. 60, 同訳書四二ページ。

(5) Poulantzas, p. 63, S. 64―5, 同訳書四五ページ。

なお、プーランツァスの「社会的諸関係」の概念については、プーランツァス、田口・山岸訳『資本主義国家の構造Ⅰ』未来社、一九七八年、九九―一〇八ページ参照。

(6) Poulantzas, p. 61, S. 63, 同訳書、四四ページ。

(7) Poulantzas, p. 71, S. 71, 同訳書、四九ページ。なお、プーランツァスの「権力ブロック」「同盟」などの概念については、プーランツァス、田口・綱井・山岸訳『資本主義国家の構造Ⅱ』未来社、一九八一年、八〇―九八ページ、および田口富久治『現代政治学の諸潮流』未来社、一九七三年、二二―二五ページ参照。

(8) Poulantzas, p. 66, S. 67, 同訳書、四七ページ。

- (9) Poulantzas, p. 139., S. 144., 同訳書、九七ページ。
- (10) Poulantzas, p. 74., S. 74., 同訳書、五一ページ。
- (11) Poulantzas, p. 66., S. 68., 同訳書、四七ページ。
- (12) ドイツについては、p. 89., S. 91., 同訳書、六二ページ。イタリアについては、「一九二一年のうちに不可逆点に到達していた」(p. 114., S. 120., 同訳書、八一ページ。)としているだけで、具体的な指標はあげていない。
- (13) Poulantzas, p. 66., S. 68., 同訳書、四七ページ。
- (14) Poulantzas, p. 86., S. 89., 同訳書、六一ページ。
- (15) Poulantzas, p. 101., S. 105., 同訳書、七一ページ。
- (16) Poulantzas, p. 66—7., S. 67—8., 同訳書、四七—四八ページ。

二 「不可逆点」の問題点

プーランツァスの提示する理論的フレームないし理論的タームはそれぞれに示唆的であるが、なかでも「不可逆点」については、きわめて重要な問題提起である。タールハイマー (A. Thalheimer) やトロツキー (L. Trotsky) 等に、主としてドイツを対象としたファッション化過程の鋭い分析があることは周知のとおりであるが、両者の分析にも「不可逆点」に相当するものはないようである。⁽¹⁾ そもそも「不可逆点」というターム自体が私たちには耳慣れない言葉であるが、例えば、熱力学においては、高温の物体から低温の物体への熱の移動は「不可逆過程」であるといったような使われかたがなされている。⁽²⁾ あるいはプーランツァスのタームもそのようなところにヒントがあったのかもしれない。

さて、ファッション化過程において、ファシズム政権成立以前に、すなわちファシズムの政権掌握以前に、「不可逆点」

が存在するのだとするならば、この点こそ最も重要な時点ということになる。それは、ファッショ化を阻止するうえで決定的な意味をもつからである。「不可逆点」を接近させないことが反ファシズムの当面の課題となるはずである。この「不可逆点」の問題提起は、わが国の研究者にも大きな影響を与えた。多くの研究者が「不可逆点」についてふれているが、あまり内在的な検討がなされないままそのタームを使用している場合が、しばしばあるように思われる。

前節においてみたようにプーランツァスの「不可逆点」は、「特殊な政治危機」の概念とむすびついている。政治危機論を全面的に検討する必要があるのであるが、いまはその準備はない。⁽³⁾プーランツァスが「特殊な政治危機」の問題を提起したことにより、(一)政治危機の特殊な種類の特定化、つまり革命情勢とつながるのではなく、ファッショ化へとつながるような政治危機があることを明確にした。(二)政治危機は、固有のリズムをもつ過程としてとらえることを可能にした。(三)ファッショ化過程のなかで質的に異なる飛躍点(これをプーランツァスは「不可逆点」とした)⁽⁴⁾が存在することを明らかにした。

しかし、疑問もいくつかある。プーランツァスのいうファシズムに導く「特殊な政治的危機」の特徴は、労働者階級がすでに「敗北」しているという評価が前提となっている。この「敗北」のメルクマールは必ずしも明確ではないようである。たしかに後述するようにファッショ化過程のなかで、反ファシズムの側の手づまり状況が出現する。⁽⁵⁾しかし、そこでも労働者階級の「敗北」は相対的なものでしかなく、すくなくとも決定的「敗北」とはいえない。労働者階級の「敗北」を、労働者側のヘゲモニーの失敗(グラムシ)との関連において位置づけることは、今後の課題であろう。安部博純氏は、プーランツァスの「不可逆点」の設定という問題提起そのものは高く評価しつつも次のように批判する。

「不可逆点」の設定には反ファッション勢力の解体という条件も考慮に入れなければならない。なぜなら、ファッションが権力ブロックの指導的分派の支持をえたとしても、反ファッション勢力が健在であれば、その時点は『不可逆点』ではなくて依然として『可逆点』だからである。とすれば、労働者階級の敗北は『開始』点のメルクマールよりもむしろ『不可逆点』のメルクマールとしたほうがよいと思われる。⁽⁸⁾

安部氏の意見に私も賛成である。前節でみたプーランツァスの論理からするならば、ファッション化過程の「開始」以降、ブルジョアジーが「主要矛盾の主要側面」であるとみるので、労働者階級をはじめとする国民諸階層の動向は視野に入っていない。

第二の疑問は、「不可逆点」の設定時期についてである。あまりに早すぎるということである。プーランツァスのいう意味での「不可逆点」が存在するとすれば、それは、ファシストの政権掌握ないし権力掌握と深い関係をもっていると考えられる。あまりに常識的すぎるかもしれないが、イタリアにおいては、マッテオッティ事件後の「政治危機」が終息した以降の時点（一九二六年）であり、⁽⁹⁾ドイツにおいては、一九三三年一月三十日のヒトラー政権の成立後の三月二十三日の「授権法」とそれから展開されたいわゆる「強制的同質化」（Gleichschaltung）の時点で「不可逆点」が到来すると思われる。⁽⁸⁾

第三の疑問は、それではプーランツァスが「不可逆点」と見誤ったものは何であるかということである。それは、ファッション化過程の第二段階の到来ではなかったかと考える。後述のように、「特殊な政治危機」のさらなる深化のなかで、「上から」の国家権力とファシズム大衆運動の「下から」の有機的関連において、ファッション化のダイナミズムが作動しはじめる段階の到来であった。そのダイナミズムは反ファシズム闘争を手づまり状態におしやることになった。そのような質的な新しい段階の到来を意味した。

以上のように、いくつかの疑問点ないし検討を必要とするものも含まれてはいるが、プーランツァスの問題提起のもつ積極的側面は無視されてはならない。

- (1) タールハイマーのファシズム分析については、A. Thalheimer, Über der Faschismus, in: Faschismus und Kapitalismus, Frankfurt 1967, Der Faschismus in Deutschland. Analysen der KPD—Opposition aus den Jahren 1928—1933, eingeleitet und herausgegeben von der Gruppe Arbeiterpolitik, Frankfurt 1973, トロッキーについては、徳田・弥永訳『トロッキー選集』第七巻、「社会ファシズム論」等を参照されたい。タールハイマー、トロッキーのファシショ化過程の分析については、山口前掲『現代ファシズム論の諸潮流』、一四四—一五二ページを参照。
- (2) 「不可逆過程」(『世界大百科事典』第二六巻、平凡社、一九七二年、二八一ページ)。
- (3) 山口定氏は「政治危機論」の立遅れについて次のように指摘されている。「マヌイルスキーは、ここで、『レーニンもスターリンも政治的危機と革命的危機とを対置することはなかった』ことを強調して、エルコル(トリアッティ)の『政治的危機』の概念を拒否する趣旨を長々と弁じて立っているが、その論旨は明快とはいえない。要するに、それは、必ずしも革命にはつながらないが、従来の国家形態の重要な転換をもたらすことになるような性質の『危機』(＝『政治的危機』)の概念を拒否することであって、当時、彼がファシズムの確立が『国家形態』(この頃は“Statistypus”という誤解を招きやすい用語が用いられていた)レベルの転換であることを否認する立場をとっていた…ことも論理的には見合っている。しかし、実際には、『革命的危機』の概念と前述の意味での『政治的危機』の概念とを一応区別したうえで、その両者の関連を検討しつつ情勢分析を行なうという視点が絶対に必要であった。この点に関するマルクス政治学の『情勢論』、『危機』論の立遅れは、人民戦線の時代を経て基本的には今日まで続いている。(山口前掲『現代ファシズム論の諸潮流』九八—九ページ)。
- (4) プーランツァスは、別の著作のなかで「政治危機」を「政治的領域における諸矛盾の凝集から結果し、政治的闘争における階級関係にも国家装置にも影響を与える一連の特殊な属性に存する」とし、政治危機にかかわる補足的論点として、①政治危機の特殊な種類の特定化、つまりいっさいの政治危機は革命情勢やファシショ化の危機と同一視できないこと、②政治危機は一種の一次的なもえひろがりには還元されず、固有のリズムを有し、かつかなり長期的にくりひろげられる

現実の過程を構成すること③政治危機はそれ固有の諸要素の一つとして国家危機を含むが、後者には還元されえないこと。政治危機は主要には階級闘争の力関係の実質的修正であるが、これらの修正が、特殊な仕方、国家装置の内部の危機の固有の諸要素を決定するのである。④政治危機はイデオロギー危機につねに連節し、後者は前者の一構成要素となること、そしてイデオロギー危機は、国家にかかわる問題においては、正統性の危機に表現されること、を指摘している。

（田口前掲『マルクス主義国家論の展開』七四―五ページ）

（5）栗原優氏は、ドイツにおける政治危機を次のように特徴づける。「ワイマル末期の政治的危機を特徴づけるものは、民衆における一般的な分裂である。それは失業労働者と就業労働者の分裂であり、共産党と社会民主党の分裂であり、労働者と中間層の分裂であり、共産党・社会民主党とナチスの分裂であり、そして、軍隊・警察を含めた国家・官僚機構に抑圧される民衆と、これに仕える民衆との分裂である。このような深刻な分裂によって議会制民主主義は梗塞状態に陥ったのであるが、その分裂はまた民衆を革命の側に組織することを許さなかったのである。支配層はこのような状況を前にして、反革命というよりはむしろ、自己の支配を打ち固めるためにその主導権を争ったのであった。」（栗原優『ナチズム体制の成立』ミネルヴァ書房、一九八一年、七一ページ）

（6）安部前掲『日本ファシズム体制論』二四ページ。

（7）デ・フェリーチェ『ファシズムを語る』ミネルヴァ書房、一九七九年、六一―三ページ。なお、イタリア・ファシズムに関する研究動向については、村上信一郎『イタリアにおけるファシズム研究——デ・フェリーチェの『ファシズムについてのインタヴュー』をめぐる論争を中心に』『西洋史学』第二一三号、一九七九年を参照されたい。

（8）K. D. Bracher, *Stufen totalitärer Gleichschaltung. Die Befestigung der nationalsozialistischen Herrschaft 1933/34*, in: *Vierteljahreshefte für Zeitgeschichte* 4 (1956), S. 32ff., 山口前掲書、一一―一三ページを参照。

三 統一戦線成立の客観的要因と主体的要因

ファシズムの台頭には、反ファシズム（ファッション化阻止）統一戦線を組んで闘わなければ、それを阻止すること

はできない。しかし、これまでの考察で明らかにしてきたように、ファッショ化過程においては、ある時点すなわちファッショ化過程の第二段階から厳密な意味でのファッショ化のダイナミズムが作動している。そのことが、統一戦線成立にとってどのような作用を及ぼすのであろうか。この問題を明らかにする前提として、統一戦線の成立の要因について若干の整理をしておきたい。統一戦線成立にはさまざまな諸要因が働いているが、基本的にいって、客観的要因と主体的要因があると考えられる。⁽¹⁾これまでの研究は、主体的要因に注目し、統一戦線を推進するはずだとされている労働者政党・労働組合等を中心とする諸組織の指導部ないしリーダーたちの状況認識、戦略戦術論、とくにファシズム観、民主主義観などの抽出に努力を傾注し、そこに成立・不成立の主たる原因をみた。しかし、問題はそこだけにあつたのではない。

歴史的にみた場合、直前までお互いを敵対勢力と位置づけていた政党や労働組合の間においても、ある客観的条件の変化によって、急転直下統一へむかわせる政治力学が働くことがしばしばあつた。これを「統一の磁場」とよぶことにしたい。たとえば、そのような例は、一九二〇年の反カップ闘争において存在した。⁽²⁾反カップ闘争では、その直前まで社会民主党と共産党の対立は深刻であつた。ドイツ共産党およびコミンテルンは、まだ統一戦線戦術を定式化する以前の段階（コミンテルンが統一戦線戦術を定式化したのは一九二一年十二月プレナムにおいて）にあつた。ドイツ共産党は、ドイツ社会民主党こそドイツ革命を圧殺し、旧第二帝制の支配層との同盟により政権を握り、共産党を弾圧している張本人ととらえていた。前年の一九一九年一月には、有名な共産党の指導者カール・リープクネヒト（Karl Liebknecht）やローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg）などが、官憲の手によって殺されるといふ事態があつたため感情的にも最悪の状態にあり、対立は決定的であつた。それにもかかわらず、現実の反カップ闘争のなかでは、社・共両党にドイツ独立社会民主党（Unabhängige Sozialdemokratische Partei Deutschlands、

USPD)と無党派を加えた統一行動や統一戦線が組織された。カップ・クーデターは、ワイマール・デモクラシーを全面的に否定しようとする右翼勢力の武力をもちいた大規模な反動攻勢であった。クーデターによってもたらされた「政治危機」は、労働者諸政党の幹部たちが予測できなかった規模での労働者大衆の統一行動を生み、統一戦線組織をつくり、統一行動はさらに巨大な闘争をよびおこした。民主主義を守り育てようと決意した労働者大衆が、きわめて敏速に行動をおこし、労働者諸政党や労働組合を統一へとおしやったのである。一二〇〇万人が結集した統一戦線は、カップ・クーデター政権を打倒した。

さらに一九二三年のドイツにおいて、ドイツ共産党は統一戦線戦術を实践する立場からドイツ社会民主党との統一を強く望んでいたが、社会民主党中央指導部は、共産党のこのような動きに対して強い警戒心と敵意をいだいていた。社会民主党は「政治危機」のなかで大衆運動がプロレタリア革命を導きだすことに強いおそれをもっていた。にもかかわらず、クーノー (Wilhelm Cuno) 政府打倒闘争においては、統一戦線が結成され、その目的を達成した。⁽³⁾ またザクセン (Sachsen)、チューリンゲン (Thüringen) の両州においては社・共連合州政府の樹立に成功した。

一九三四年のフランスにおいても、社共統一行動に移る直前の両政党間の関係は良好なものではなかった。それでも同年二月の右翼の騒擾を契機として社会党・急進社会党・共産党の政党間の統一と大衆レベルでの統一は実現した。それがフランス人民戦線へと発展していった。⁽⁴⁾ 一九三六年のスペイン人民戦線においても、⁽⁵⁾ 一九三〇〜四〇年代の中国の抗日民族統一戦線においても、⁽⁶⁾ 同じような状況が存在した。日本の一九六〇年の安保闘争においても事情は変らない。⁽⁷⁾

このようにみると、統一戦線が現実のものとなったときは、その直前まで政党や労働組合の指導部がどのように考えていたかにかかわらず、統一へのダイナミズムが客観的条件の変化によってもたらされていることがわかる。

そして、いずれの場合も、反動化のドラスティックな進行を眼前にして、このままでは大変なことになる、なんとかしなくてはと心を痛めた大衆が行動をおこし、政党を統一の方向に動かしたのであった。政党や労働組合を統一の方向へおしやる政治力学が働らくなかで、リーダーの認識の変化、さらには統一を志向するグループがその組織内で多数派を形成するといったことが起こる。

統一戦線実現の客観的条件は、反動化の進行による民主主義の危機といってもよいであろう。もちろん、「政治危機」の存在が、すべて統一戦線実現の客観的条件となるわけではないが、⁽⁸⁾「政治危機」のなかで統一戦線の客観的条件が生まれる可能性があることを確認する必要がある。

(1) 統一戦線の成立条件や統一戦線の発展の論理について分析したものに清水慎三編著『統一戦線論』青木書店、一九六八年、がある。

(2) 反カップ闘争については、次の文献を参照されたい。拙稿「ヴァイマル・デモクラシーの危機と統一戦線——一九二〇年の反カップ闘争——」『九大法学』第二六号、一九七二年、篠塚敏生「カップ一揆とドイツ共産党」『熊本大学教養部紀要』、人文・社会科学編、第一五号、一九八〇年、同「カップ一揆とドイツ社会民主党」『西洋史学』第一一六号、一九八〇年、同「カップ一揆とルール労働者」『熊本大学教養部紀要』、人文・社会科学編、第一六号、一九八一年、松俊夫「カップ一揆とドイツ民衆党」『成城文芸』第九〇号、一九七九年、同「九項目綱領をめぐる交渉の意義——カップ一揆直後の政治情勢——」『成城文芸』第九五号、一九八一年、上杉重二郎『統一戦線と労働者政府——カップ叛乱の研究——』風間書房、一九七八年、また、反乱の主体であった軍部そのものを問題とし、ワイマル共和制下の国防軍の歴史のなかに位置づけようとしたものに、室潔「カップ・リユトヴィッツ一揆と国防軍——ラインハルト辞任の意味——」『社会科学討究』第八〇号、一九八二年一〇月刊・所収がある。

なお、資料集として、Erwin Könnemann, Brigitte Berhold, Gerhard Schulze, Arbeiterklasse siegt über Kapp und Lüttwitz, Berlin, I, II, 1971. が便利である。

(3) 拙稿「政治危機と統一戦線——一九二三年のドイツ『革命』——」(一)(二)『北九州大学法政論集』第一巻創刊号、第

- 三巻一号、一九七四年三月、一九七五年六月刊・所収、木全清博「ドイツ共産党（KPD）のプロレタリア統一戦線運動」（『歴史研究』（大阪教育大学）第二一号、一九七三年刊・所収）、菊川清美「ヴァイマル共和国初期労働者政府運動の一考察」（『歴史評論』第三〇〇号、一九七五年刊・所収）、山田徹「ドイツ共産党の統一戦線運動の構造」（一）（二）（三）（四）（神奈川法学）、第二二巻一・三号、第一三三巻三号、第一四巻二・三号、第一七巻一号、一九七八―八二年。
- （4）平田好成『フランス人民戦線論史序説』法律文化社、一九七七年、平瀬徹也『フランス人民戦線』近藤出版社、一九七四年、D・ゲラン、海原峻訳『人民戦線——革命の破産』現代思潮社、一九六八年。
- 国内の動きだけでなく、国際政治の動向やソヴェトの外交政策との関連でもって人民戦線運動をみる視角も必要であろう。例えば、B・レイプゾン、K・シリニャ『現代革命の理論——コミンテルンの政策転換』合同出版社、一九六六年、富永幸生・鹿毛達雄・下村由一・西川正雄『ファシズムとコミンテルン』東京大学出版会、一九七八年、山極潔『コミンテルンと人民戦線』青木書店、一九八一年、加藤哲郎「世界政党と政策転換（一九三四―三五年）」（一）（二）、名大『法政論集』第七八号、第七九号、一九七九年刊・所収、等を参照されたい。
- （5）スペイン人民戦線の成立以前の政党関係については、Hugh Thomas, *The Spanish Civil War*, third Edition, London, 1977, pp. 102-124, ヒュー・トマス、都築忠七訳『スペイン市民戦争』I、みすず書房、一九六二年、六四―七三ページ、斉藤孝編『スペイン内戦の研究』中央公論社、一九七九年、を参照されたい。
- （6）中国の抗日民族統一戦線の成立については、野沢豊「中国の抗日民族統一戦線」『岩波講座・世界歴史』第二八巻（一九三〇年代）、三〇五―三三八ページ。
- （7）日本の安保闘争については、梅田欽治「六〇年安保闘争」（『体系・日本現代史』第七巻、日本評論社、一九七九年）二一六―二四五ページ、信夫清三郎『安保闘争史―三五日間政局史論―』（新装版）世界書院、一九六七年、を参照されたい。
- （8）岡本宏氏は、日本のファッション化と統一戦線の条件性に関して、次のような研究史上の課題を提起する。
- 「とくに指摘したいことは、さきのプーランツァスの『不可逆』点に示唆をえて提起した問題点である政治情勢の展開とのかかりである。日本のファッション化が山東出兵↓満州事変↓日中戦争という戦争先行およびそれをテコに進行したという独・伊などことなる政治過程を通ったということが、金融恐慌から大恐慌のなかで苦悩する民衆を軍部主導のファシズムへと形態変化を遂げつつある権力への統合にどのような特徴的な機能を果たしたのか、また、そのことは、逆に、

反ファッショ勢力の結集にどのような影響を与えたかという問題である。それは、広川氏が整理した排外主義と統一戦線の条件性の問題にかかわる。すなわち、近代天皇制国家の発展がたび重なる戦勝をテコになされ、国家の発展と自己の発展を二重写しにする傾向の強かった民衆の戦争と平和にかんする意識状況や対アジア観が、戦争→ファシズムというコースを歩んだ日本の特殊なファッショ化過程のなかで、反ファシズム統一戦線の形成にどのような条件規定性を与えたのかということを問うことである。」(岡本前掲論文、三四ページ)

(9) なお、民族的抑圧の存在する場合の統一戦線の成立条件については、拙稿「ドイツ共産主義運動の『個性』→コミュニズムと『国民的伝統』へのアプローチ」『法政研究』(杣教授・海原教授還暦祝賀論文集)第四七巻第二―四合併号、一九八一年三月刊・所収、五七七―五七九ページを参照されたい。

四 ファッショ化過程と統一戦線

(一) ファッショ化過程の諸段階とファッショ化のダイナミズム

プランツアスのファッショ化過程の段階区分を参考にしつつ、これまでの諸研究を考慮して、ごく大まかな段階区分を試みれば次のごとくである。ファッショ化過程には、基本的に四つの段階があるように思われる。第一の段階は、「特殊な政治危機」の発生にともなう「反動化」の段階、第二の段階は、第一段階の「反動化」を前提としてファッショ化のダイナミズムが作動しはじめ、ファシストによる政権掌握までの段階、第三の段階は、ファシストの政権掌握から「不可逆点」に至る段階である。第四の段階は、「不可逆点」からファシズム体制の成立までの時期である。ここで体制のファッショ化は一応の完成をみ、ファシズム体制の確立・崩壊へと続いていく。

第一の段階は、安部博純氏や山口定氏の労作に依拠しつつ整理すれば次のようになる。「特殊な政治危機」発生に

ともなうて、権力ブロック内部で、これまでの支配の方式では支配の継続が困難となったので、政治レジーム（体制）ないし国家形態の転換を主張するフラクションが出現する（権力ブロック内部での体制構想レベルの対立）。「上から」の「反動化」が進行しはじめる。「特殊な政治危機」とはいかなる現象であるか。

一言でいうならば、既存のヘゲモニーの危機、体制イデオロギーの危機である。すなわち、①それまでの支配体制を支えてきたイデオロギーの大衆統合力の喪失、②権力ブロック内部における統一的意志の形成の破綻、がそれである。このようななかで社会レベルでは、国民意識の変容が進行する。一つは既成の支配層が腐敗や失政の連続によって大衆の信頼を決定的に失いはじめる。他方、反体制勢力である社会主義運動や労働者運動が大衆の期待にそえず、大衆の中に幻滅が拡りはじめるが、まだ決定的に見放されたわけではない。要するに、支配の側が「ブルジョア民主主義」の形態で労働者階級を初めとする国民諸階層を統合することがもはや不可能となったが、労働者階級の側にとっても革命への展望が開けていない独特の政治状況である。そのような状況のなかで、「進歩」「反動」「革命」「反革命」といった観念についての既成の枠組が溶解し、「進歩」と「反動」の両義性をもったファッションの思想が大衆にとらえやすい条件が生まれる。

第二の段階は、権力ブロック内部において「上から」の反動化を推進した政治レジームないし国家形態の転換を主張するフラクションが、「下から」のファッション政党との連携を模索しはじめる。第一段階におけるようなファッション浸透の条件がさらに拡大し、ファッション勢力の動きが活発化し、ファッションの非合理主義的大衆運動ないし大衆動員が飛躍的に高まる。「上から」と「下から」の有機的関連においてファッション化へのダイナミズムが作動しはじめる。このダイナミズムの内容は、国によりさまざまであるが、ファッション化の進展を急速におしすすめる力となる。

この段階になると前述の国民意識のさらなる変化等により労働者運動ないし社会主義運動の側に「方向感覚喪失」

や、組織内部に「弛緩現象」が一定規模で生まれてくる。反ファシズム闘争も手づまりとなり、国民大衆のなかに諦め、無力感が拡大する。

第三の段階は、ファシストの政權掌握（ファシスト政權の成立）によって、上からの国家権力を使った「強制的同質化」（「均制化」*Gleichschaltung*）が進められ、真の「不可逆点」が到来することになる。⁽²⁾

第四の段階は省略する。

（二）ファッショ化過程と統一戦線

ファッショ化過程のなかのどの段階までファッショ化阻止の可能性、とくに、その保障である反ファシズム統一戦線の可能性が存在したのであろうか。ファッショ化過程がファシズムと反ファシズムとの力関係によるジグザグ・コースをとるのだとするならば、各国の政治状況によっても異なるであろうし、反ファシズム統一戦線といった場合、労働者統一戦線か人民戦線かによっても、さらに全国的統一戦線か地方的・地方的統一戦線かの違いもある。ここでは、ファッショ化過程においては中間層の動向からみて人民戦線型の統一戦線の形成は困難と思われるので、労働者統一戦線をそして全国的規模での形成の可能性をとりあげたいと考えている。

ファッショ化過程において統一戦線形成の可能性があるのは、結論的にいえば、その第一段階である「反動化」の段階だけであるといえよう。「反動化」の段階においては、前述したように「統一への磁場」とよびうる政治力学が発生する可能性がある。いうまでもないことであるが、そのような「磁場」が必ず発生するということではない。ファッショ化過程においては、ファッショ化を導きだすような「特殊な政治危機」以外の「政治危機」の場合と比較すると「磁場」はむしろ発生しにくいといえよう。それでも発生の可能性は存在するのである。「反動化」の進行、と

くにそのドラスティックな進行は、労働者大衆の危機感をよびおこし、行動に立ちあがらせ、その力が政党・労働組合指導部をして統一の方向に動かしめる政治力学が発生することがある。

イタリア、ドイツ、日本では、同じくファッショ化過程といってもそれぞれ特殊性をもち同一には論じられないが、ドイツの場合を例としてみてみたい。ドイツのファッショ化過程を一応時期区分すれば、第一期、一九二八年～三二年七月（パーペン・クーデターまで）、第二期、一九三二年七月～三三年一月（ヒトラーの政権掌握まで）、第三期、一九三三年一月～三四年六月（レーム事件まで）、第四期、それ以降となろうか。ドイツのファッショ化過程における第一段階（一九二八～三二年七月）において、ブルジョア民主主義政治体制の危機のなかで、「反動化」への危機感にささえられた大衆の自然発生的統一行動が発生した。一九三〇年末から三一年春にかけては「反ファシズム代表者会議（Delegierten konferenz）運動」があり、一九三二年春から夏にかけては「反ファシズム行動」（Antifaschistische Aktion）が展開された。⁽⁴⁾これらの運動の存在は、全国的規模での反ファシズム統一戦線形成の可能性が存在していたことを示唆するものである。だが、それらの運動はかなりの程度進展しながらも失速状態におちいり、反ナチ統一戦線は実現されなかった。⁽⁵⁾それは、「特殊な政治危機」という客観的条件と、統一戦線運動の目的意識的追求の弱さという主体的条件の相互補完的作用によって規定されたものである。

ファッショ化過程の第二段階においては、「特殊な政治危機」の一層の深化と、ファッショ化のダイナミズムが作動することの影響によって、反ファシズム勢力内部、とくに労働者運動ないし社会主義運動の側に「方向感覚喪失」や組織的「弛緩現象」が生まれてくるが、このようななかでは、労働者大衆から政党・労働組合指導部への統一をおしあげる政治力学も発生しにくいし、指導部の側からの現状打破のイニシアティヴも生まれにくいといわざるをえない。もっともファシスト勢力の内部分裂や国際政治のインパクトなどによる予期せぬ展開によって事態がまったく変

化しないとはいえず、反ファシズム勢力にファッショ化阻止のすべての可能性がなくなるわけではない。その点が、第二段階とファシストの政權掌握をへて「不可逆点」の到来へといたる第三段階とは質的に異なるのである。

以上のように、ファッショ化過程の第二段階においては反ファシズム統一戦線の可能性はきわめて小さいものになる。そして第三段階の「不可逆点」の到来によって、ファッショ化過程における反ファシズム統一戦線形成の条件は最終的になくなる。したがって、ファッショ化過程において、反ファシズム（ファッショ化阻止）統一戦線形成の可能性は、つねに存在するのではなく、その第一段階にあたる時期にしか存在しないといえよう。⁽⁶⁾

(1) 山口定『ファシズム——その比較研究のために』有斐閣、一九七九年、一八三—一七ページ。安部前掲「日本ファシズム体制論」二五—三八ページ。なお、西川正雄「ヒトラーの政權掌握」『思想』一九六七年二月号をも参照されたい。

(2) 「強制的同質化」の意味については山口同書、一八五ページ。なお当時の運動については、次を参照。Siegfried Vietzke, Die Kommunistische Partei Deutschlands im Kampf gegen den Hitlerfaschismus, in: Die Arbeiterbewegung europäischer Länder im Kampf gegen Faschismus und Kriegsgefahr in den zwanziger und dreißiger Jahren, Dietz Verlag Berlin, 1981, S. 149—177.

(3) 一九三〇年末から一九三一年初頭にかけてドイツ全土に展開された「代表者会議運動」については、星乃治彦「ヴァイマル共和制末期における反ファッショ運動の諸相——ドイツ共産党の『人民革命』構想をめぐって——」『歴史評論』一九八一年六月号、九八—一〇八ページ、に詳しい。

(4) 拙稿「一九三二年の反ナチ統一戦線問題——ドイツ共産党の動向を中心として——」『法政研究』第四五巻第二号、一九七七年、前掲拙稿「ワイマル共和制期の統一戦線運動」五九五—六〇三ページ、参照。

(5) 山口定氏は「(一九三二年)五月から七月の初めまでのおよそ二カ月足らずの期間は、一九二〇年のカップ一揆の時を除けば、ドイツにおいて労働者戦線の強力な統一が実現できるかに思われた唯一つの時期であった」(山口定『現代ヨーロッパ政治史・下』福村出版、一九八三年、三七四ページ)と指摘されている。この指摘に賛成であるが、労働者大衆の自然発生

的な統一の動きを考慮するならば、期間としてはもう少し前から必要があるように思われる。

(6) 日本における統一戦線の可能性が消滅した時点については、一九三一—三二年（満州事変前後）頃までとする江口圭一氏や安部博純氏の見解と一九三五—三六年（日中戦争前夜）頃までの時期とする岩村登志夫氏と神田文人氏の見解が分れている。また後者では、一九三五—三六年を最大の可能性があった時期とみる岩村氏の見解とそれほどには高くみない神田氏の見解との相違もある。（江口圭一『都市小ブルジョア運動史の研究』未来社、一九七六年、五〇〇—二ページ。安部前掲論文、四二ページ。岩村登志夫『日本人民戦線史序説』校倉書房、一九七一年、二二〇—二五二ページ。神田文人「日本における統一戦線」（江口朴郎他編）『世界史における一九三〇年代』青木書店、一九七一年、五一ページ。

おわりに

プーランツァスは、ファッション化過程における「不可逆点」の存在を指摘し、ファッション勢力の政権掌握以前であっても、ファッション化阻止の可能性がほとんどなくなる時期があることを指摘した。この「不可逆点」の理論自体は、これまで検討してきたように、かなり疑問の多いものであった。しかし、反ファシズム統一戦線の形成の可能性という観点からみて、ファッション化過程においてプーランツァスのいう意味での「不可逆点」ではないにせよ、ある時点をすぎると統一戦線の形成そしてファッション化阻止が難しくなることも事実である。しかも、その時点到来の直前までの時期は、反ファシズム統一戦線成立の客観的条件からみて、戦線結成にとっては好期であった。このこともつ意味は重大である。この小論では問題点の指摘にとどまり十分展開できなかった。今後の課題としたい。ヒトラーの政権掌握（一九三三年一月三〇日）から五〇年目にあたる今日、プーランツァスの問題提起からわれわれが学ばなければならないことは多いと考える。

（一九八三年二月）